

1 歳児のごっこ遊びに関する一考察

—保育士との関係と模倣に着目して—

A Study on the Pretend Play of 1-Year-Olds

Focusing on the Imitative Behaviors and the Relationships between Nursery Teacher and 1-Year-Olds

前田 綾子

Ayako MAEDA

要旨(Abstract)

本論では、1 歳児の「ごっこ遊び」について論考する。それは、模倣の面白さにあると考えられる。1 歳児は、保育士が思っている以上に探索活動を通して様々なものに会い、好奇心をもって環境に関わっていきこうとする。そのベースには、保育士と子どもの愛着関係、信頼関係が存在する。そして1 歳児は保育士のすることをよく見ている。保育士は、子どもにどんな模倣をして欲しいのか、というねらいや願いをもって子どもに関わる必要がある。また、何気ない子どもの小さな仕草の中に隠れている子どもの思いや模倣に気づき、その思いに寄り添うことで子どもは自分の見立てやふりが保育士に伝わったことを、喜び、イメージを共有して遊ぶ楽しさを感じ、「ごっこ遊び」として展開していくのである。このように、1 歳児の「ごっこ遊び」の言語活動や人との関わり、ものの認識等に与える影響はたいへん大きいものがある。1 歳児だからと保育士が主導するのではなく、一人ひとりの子どもの小さな模倣や「ごっこ遊び」の元になる子どものつもりやふりに、保育士が気づき、子どもを主体として応答的に関わり、遊びがもっと楽しくなるように環境の再構成をしたり、一緒に遊びながら必要な援助をしたりするなど、保育士の丁寧な関わりが重要であると考えられる。

キーワード：ごっこ遊び 1 歳児 情緒の安定 模倣

はじめに

子どもたちにとって「ごっこ遊び」は年齢、性別を問わずに人気のある面白い遊びである。保育所では、子どもたちが自主的に主体的に遊び始め、展開をしていく姿もよく見られる。また、〇〇ごっこと呼ばれる遊びは、限りなくあげられる。このように、どの年齢でも見られる「ごっこ遊び」であるが、ごっこ遊びの面白さというものは、年齢や発達により変化していくと考えられる。そこで、本論では、「ごっこ遊び」の芽生えや萌芽とも言える模倣に着目して、1 歳児の「ごっこ遊び」についてを主に保育実践を基に、考察するものである。

I. 「ごっこ遊び」とは

『保育用語辞典』(2016)によると「ごっこ遊び」とは、「子どもが日常生活のなかで経験したことを模倣して現実の遊びで再現したり、また現実の物、人、事をイメージして象徴的に遊ぶことを包括した遊びを示す。」とある¹⁾。この解釈によると、「ごっこ遊び」は現実のものをベースとして成り立つ遊びであると考えられる。しかしながら、子どものごっこ遊びの中には、「おばけごっこ」などというように、現実にはありえないイメージの世界のごっこ遊びもみられることから、筆者は「ごっこ遊び」とは、現実の世界とや仮想の世界を子どもが自由にイメージしながら、まねっこや自分ではない誰かや、何かになることを楽しむ遊びであるとする。

『保育所保育指針』（平成 29 年）の中で²⁾、「ごっこ遊び」は、1 歳以上 3 歳未満児の保育に関するねらい及び内容において、領域「人間関係」の内容⑥で「生活や遊びの中で、年長児や保育士等の真似をしたり、ごっこ遊びを楽しんだりする。」とあり、領域「環境」の内容②「玩具、絵本、遊具などに興味を持ち、それらを使った遊びを楽しむ」とある。また領域「言葉」の内容④「絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣をしたりして遊ぶ」や、⑤「保育士等とごっこ遊びをする中で、言葉のやり取りを楽しむ」とある。さらに領域「表現」の内容⑤「保育士等からの話や、生活や遊びの中での出来事を通して、イメージを豊かにする。」や、⑥「生活や遊びの中で、興味のあることや経験したことなどを自分なりに表現する」と、複数の領域で取り上げられていることが分かる。このように、「ごっこ遊び」の楽しさには、友達などの人と関わる楽しさ、言葉のやり取りの楽しさ、物や社会事象と関わる楽しさなど様々な領域と重なり共鳴し、1 歳児の「ごっこ遊び」においても領域がそれぞれ独立したものではなく、相互に関連し、結びついていることを表していることが理解できよう。

II. 「ごっこ遊び」の始まりについて

「ごっこ遊び」の始まりは、2 か月ごろから始まる手足を使って物に触れて、感触や音の感覚を楽しむものからである。そして、感覚や運動機能を使い、操作遊びを楽しむようになる。ティッシュペーパーを次々に引っ張り出すのを楽しむというのも、この時期の遊びの特徴である。さらに、1 歳頃からコップや茶碗などの身近な生活用品を使った模倣遊びが現れるようになる。

この模倣の対象は、誰でも構わないというわけではない。模倣の対象となるのは、やはり子どもたちにとって身近な大人であることが多い。大好きな人だからこそ、真似をして見たいという意識が芽生えるのである。言わば、信頼できる大人との「情緒の安定」を基盤として見られる模倣、まねっこなのである。模倣の対象となるのは、保育所では主に保育士や友達である。先述のように、1 歳児は誰の模倣でもするわけではない。自分が心を許せる相手の模倣をするのである。それこそ保育所に入所したての時期は、保護者から離され知らない大人（保育士）に囲まれる不安な気持ちで、泣いて過ごすことが大半を占めることもある。そんな状況の中では、子どもは模倣をしようという気持ちになるはずもない。しかしながら、保育士による応答的な関わりや優しい言葉かけ等の人的な環境を通して、次第に抱かれることで安心や信頼を感じるようになる。そして、保育士との関係性を築くことで、情緒が安定していくのである。このような養護的な関わりというのは、子どもの活動、遊びの基礎（ベース）となる。その結果、「ごっこ遊び」の原点とも言える模倣、つまり「まねっこ」が始まるのである。

今井（1992）は、「幼い子どもたちの何気無い行為から、ふっとその心に刻みつけた、特定の親密な人（母親なら母親）の印象を表出する姿を、よく見ることができます。特定の大好きな人への関心が、その人の行動を注視させ、やがてそれらを、頭に焼き付けていくという、象徴機能の発達に結びついていくのだと思います」と述べている³⁾。

1 歳児クラスでよく見られるまねっこは、長四角のブロックや積み木などを耳にあてる仕草のことである。電話のまねっこだと、保育士はそれを受け止め、「もしもし〇〇ちゃんですか？」などと同じように手や物を耳にあてて、子どもに応答的に話しかける。「ア～、ア～」と嬉しそうに反応をする子どもは、自分のまねっこの意味が保育士に伝わったことが分かり、さらに電話ごっこを楽しむ。その一方で、同じようにブロックや積み木を耳にあてる仕草をしていても、それが意味をもたない単なる仕草の模倣である場合もある。物を耳にあてる仕草と話をするという電話の機能が、まだ一致していないのである。そのため保育士が「もしもし、〇〇ちゃんですか？」などと

同じように話しかけても、子どもの反応は薄いことがある。また、意味はわからなくても保育士が自分と同じことをしていることで、自分がしていることが保育士に伝わったという嬉しさや面白さを感じる子どももいる。このように、一見、電話のまねっこ「電話ごっこ」をしているように見える仕草でも、子どもによって意味が違うことを保育士等はしっかりと理解して、一人ひとりに合った対応をしていくことが必要となる。意味をもたない仕草の模倣の段階の子どもには、それが「電話」であることを認識できるように、支援的な対応をしていくことで、電話ごっこがより楽しくなると考えられる。1歳の早い段階で、このような携帯電話の模倣が出るということは、家庭の中でそのような親の姿を子どもがよく目にしていることを表しており、家庭生活の様子が子どもの遊びにも影響を与えていることが窺われる。

保育士が子どもと遊んでいるときに、ままごとのコップで「ごくごく」と言いながら飲み物を飲む真似をする、それを見ていた子どもは模倣をして飲む真似をする子どもと、「飲む」という行為と結びつかずにコップを歯でカチカチと噛んで音を楽しんでいる子どもがいる。しかしそれも、意味がわかってくると保育士と同じように顔を上に向けて飲む仕草に変わっていく。このように、仕草と仕草の意味が少しずつ繋がっていくことこそ、「真似」から学んでいくということだと感じる。「学ぶ」の語源は、「真似ぶ（まねぶ）」といわれている。ただ袋に物を詰め込むだけの遊びを、保育士が「お買い物、行ってらっしゃい」などと言葉を添えることで「お買い物ごっこ」になり、ごっこ遊びに展開していくこともある。したがって、1歳児においては子どもの仕草の中にあるその子どもの思いに気付いたり、意味付けたりしていくことが重要な関わりや支援だと考えられるのである。

Ⅲ. お昼寝ごっこ

筆者が30年以上保育現場にいて気づいたことに、毎年1歳児が見せてくれる保育士の模倣がある。それは、「お昼寝ごっこ」である。これは、保育士が意味付けをする必要がなく、見ればそれとすぐ分かり、思わずその姿に自然と笑みがこぼれてしまうものである。はじめに、保育士役の子どもが人形を布団に寝かせ、人形の上に掛け布団を、なければクッションなどを布団に見立てて掛ける。そして、その横に正座をして座り、布団の上から優しくとんとんと手の平で叩いたりさすったりするのである。その様子を見ていた子どもは、人形の横で寝転ぶのである。そうして自分で布団をかけたり、友達が布団を掛けたりし、とんとんをし始めるのである。子ども役の子は、目を閉じて眠るふりをする。子ども同士が、保育士役と子ども役を交代して、遊び出すこともある。

このような1歳児の主体的な「ごっこ遊び」が展開されることには、大きな意味があると考えられる。まず、保育所において保育士が、子どもにとって最も身近で信頼できる対象であるということである。そして、午睡の時間には自分が寝かしつけてもらうだけでなく、友達が寝かしつけてもらっている様子を、興味をもって見ているということを表している。自分がとんとんして寝かしてもらっている様子は体感としてあり、心地よさとして感じることはできる。しかしながら、その自分の状況を客観的に見ることはできない。つまり、1歳児は自分の体感だけでなく、友達の様子、保育士が何をしているのかを見ているのであり、自分のイメージの中に取り込んで行っているであろう。そして、大好きな保育士になることによって自己表現のイメージ、自分ではない人になることで自己拡大をしているのではないだろうか。保育は、「養護と教育の一体化」をもって営まれていくことから、1歳児のときの保育士と子どもの関わりのもつ意味は、相当に大きいといえる。初めは見知らぬ大人である保育士が、自分の思いや要求を受け止め満たしてくれる、一緒にいることで安心できるようになってくる。そんな保育士が安全基地となり、子どもはさまざまなものに自分から関わり、興味を広げて探索行動を続けるのである。

Ⅳ. 1歳児の「ごっこ遊び」の環境づくり

1歳児のごっこ遊びの環境を構成するときに最も気をつけたいといけなことは、子どもたちはまだ多くの言葉と物を結びつけて認識をしてはいないということであろう。そのため、環境として用意するものは、それが何なのか子ども自身がわかりやすいもの、子どもが知っているものであったり、イメージしやすかったりする物を用意しておくことが必要ではないかと考えられる。例えば、色々なものに見立てられる小さなお手玉やチェーン・リングのような物ではなく、りんご、バナナ、人参など子どもが見てわかるような直接的な玩具や、四角いブロックを携帯電話に見立てたようにイメージが湧きやすいようなものや道具を用意するのがよいのではないかと考えられる。

Ⅴ. 1歳児の「ごっこ遊び」の人的環境

「ごっこ遊び」にかかわらず、1歳児にとってはいつも自分を見守ってしてくれる保育士がいるという安心感と、情緒の安定をもたらす存在であるということが、何よりの「人的環境」としての保育士の役割だと考える。そして、ことばや言語を獲得し、これから語彙を増やしていく時期(vocabulary spurt)であることから、子どもがしている行動を言語化するようにしたい。「どうぞ」や、「いらっしゃいませ」などと、動作と合わせた言葉のやりとりをし、保育士と、友達と関わって遊ぶ楽しさの素地を経験できるようにしていく援助や支援も必要であろう。思い通りにならなくて、辛くなったときや遊びに夢中になり、何かに気付いたり発見したりしたときに、それに共感してくれる保育士がそばにいることが、何よりの「人的環境」としての保育者の役割なのではないだろうか。

おわりに

以上のことから、1歳児の「ごっこ遊び」の面白さは模倣の面白さにあると考えられるのではないだろうかと結論付けられる。

1歳児は、保育士や周囲の大人が思っている以上に探索活動や行動を通してさまざまなものに出会い、好奇心や探究心をもって環境に関わっていかうとする。そのベースには、保育士と子どもの愛着関係や信頼関係が存在している。そして、1歳児は保育士のすることを本当によく見ているのである。保育士は子どもにどんな模倣をして欲しいのか、というねらいや願いをもって子どもに関わる必要がある。また、何気ない子どもの小さな仕草の中に隠れている子どもの思いや模倣に気付き、その思いに寄り添うことで、子どもは自分の見立てやふりが保育士に伝わったことを喜び、そのイメージを共有して遊ぶ楽しさを感じ、「ごっこ遊び」として成立し、展開していくのだと考えられる。

1歳児の「ごっこ遊び」の言語活動や人との関わり、ものの認識等に与える影響はたいへん大きいと考える。1歳児だからと保育士が主導するのではなく、一人ひとりの子どもの小さな模倣や「ごっこ遊び」の元になる子どものつもりやふりに、保育士がしっかりと気付き、子どもを主体として応答的に関わり、遊びがさらに楽しくなるように環境の再構成をしたり、一緒に遊びながら必要な援助をしたりするなどといった保育士の丁寧な関わりが重要だと考える。

引用文献

- 1) 谷田貝公昭編『保育用語辞典』一藝社、2016年

- 2) 厚生労働省編『保育所保育指針解説（平成 30 年 3 月）』フレーベル館，2018 年
- 3) 今井和子『なぜごっこ遊び？ 幼児の自己世界のめばえとイメージの育ち』フレーベル館，1996 年
- 4) 河崎道夫『ごっこ遊び』ひとなる書房 2015 年
- 5) 一般社団法人日本赤ちゃん学協会編『赤ちゃん学で理解する乳児の発達と保育 第2巻 運動・遊び・音楽』中央法規，2017 年